The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

ヒトのスケジュールパフォーマンスにおける個人差
DRL の場合

松崎美沙都・深沢綾美・佐藤方哉
(帝京大学文学部)

キーワード：DRL・NEO・人格

目的：DRL のスケジュールパフォーマンスにおける個人差をうむ要因を分析する。

方法：28 名の大学生を対象として、各コンポーネントは５分の mix DRL1" DRL2" DRL4" DRL8" DRL16" DRL32" を 30 分間行う。強化は得点（１強化あたり 10 点）で、実験終了後それに応じタンジブルな好子（駄菓子）を与える。各対象者に実験終了後 日本語版 NEO-PI-R を施行する。

結果：DRL1"での１強化は１点、 DRL2" での１強化は２点、 DRL4" での１強化は４点、 DRL8" での１強化は８点、DRL16" での１強化は 16 点、DRL32" での１強化は32点としてDRLパフォーマンスの得点を求めると、最低点０、最高点 924、平均値 476.1、中央値 591.5、標準偏差 334.1 であった。

NEO の５次元の得点と DRL 得点との間には、±0.4 以上の相関係数の得られたものはなかった。各下位次元の得点と DRL 得点の間には、外向性：群居性の得点と DRL 得点との間では-0.40、開放性：価値の得点と DRL 得点との間では 0.40 の相関係数が得られた。また、外向性：刺激希求性の得点と DRL 得点との間には相関係数は-0.15 であったが、DRL 得点が 25 パーセンタイル以下である８名と DRL 得点が 75 パーセンタイル以上である８名との刺激希求性得点を U 検定で比較すると、DRL 得点の高い者は刺激希求性得点が低く DRL 得点の低い者は刺激希求性得点が高いという差が５％水準で認められた。

考察：外向性：群居性の得点の高い者は大勢の人と一緒にいるのが好きな性格の持ち主で、開放性：価値の得点の高い者は一つの価値体系に固執せず多様な価値体系を認めることの出来る性格の持ち主である。また、外向性：刺激希求性の得点高い者は刺激が欲しくてたまらないことがよくあるといった性格の持ち主である。

したがって、上記の結果からは、孤高を愛し、しかし偏狭に陥ることなく多様な価値を認めることのできる人々が、今回用いたプログレシヴ DRL ともよぶべき混合スケジュールに適応する傾向があるということになる。

行動分析学の立場からは、人格特性は行動の原因ではなく、共通の制御変数に制御されている行動のクラスターとみなされる。人格と行動との関係は気候と天候との関係に比すことができるとはエド・モリスの名言である。人格を規定する制御変数の同定が行動分析学における人格研究の課題でろう。したがって、各特性の主要な制御変数は何かの分析が今後なされねばならない。

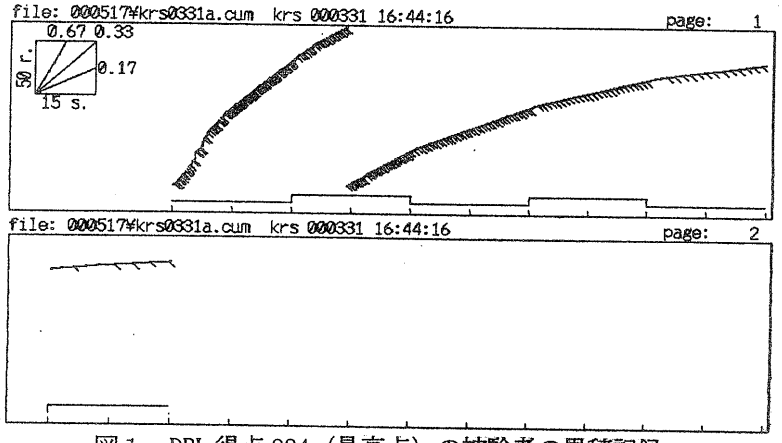

図１　DRL 得点 924（最高点）の被験者の累積記録

NII-Electronic Library Service

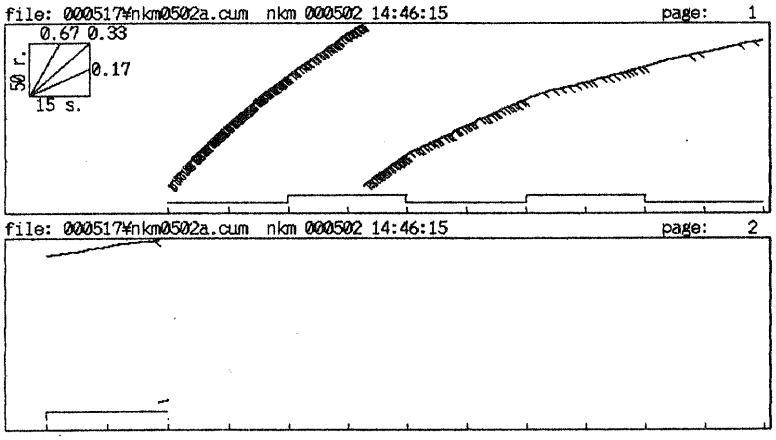

図２　DRL 得点 589 の被験者の累積記録

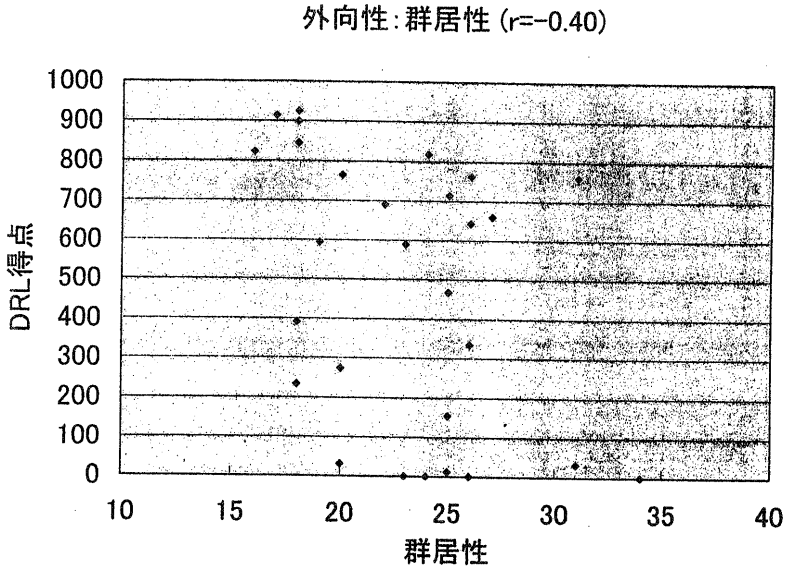

図３　群居性得点と DRL 得点との相関

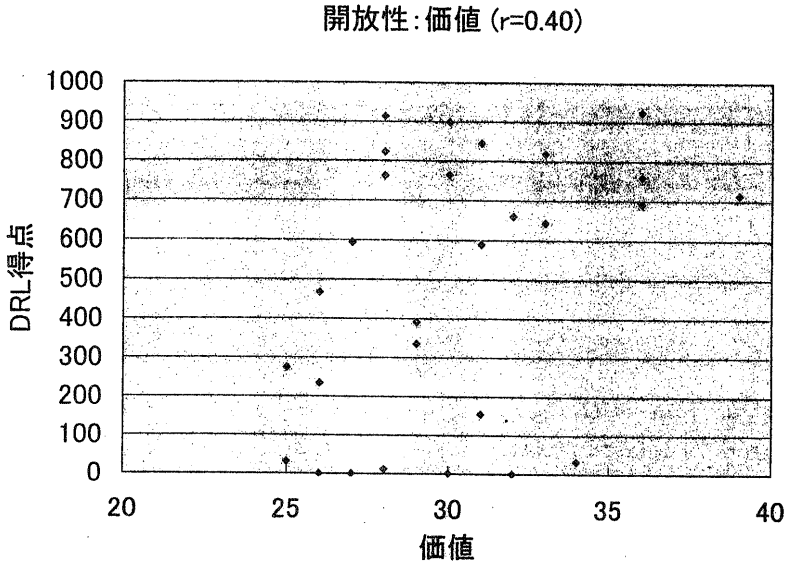

図４　価値得点と DRL 得点との相関

NII-Electronic Library Service